

た その事を知らず ^{私に} 母の事を言わ

字真にうつていふ 事なほくに美和さんか

うの用ている 着物等の若くは既成

今もその印象しおきの

遠足の始 ^前 光州から本陣へ来た時 卒業まで

このわたしの美和さんだ 今若くは昭和

十二年のころ何人で卒業後をまつている若く

婚つてお和さんかと思ふ

結婚お和さんの長女なんだ

それから今二回大阪かあり 不瀬といふ母の

兄弟もその中だ もちろん美和さんもだ

それをお和さんか場所もたかろし 何となく引

きお和さんか場所にくらしといふかおきこえて来

左の美和さんの知人のこと知らぬ

目白お和さんいふときて何となく心にやとり

お和さんあまこころ母の言葉の事ととりお和さんか

お和さん ^{お和さん} なるなるお和さん ^{お和さん}

お和さん ^{お和さん} 思つても ^{お和さん} 何となく ^{お和さん}

お和さん ^{お和さん} 思つても ^{お和さん} 何となく ^{お和さん}

お和さん ^{お和さん} 思つても ^{お和さん} 何となく ^{お和さん}

お和さん ^{お和さん} 思つても ^{お和さん} 何となく ^{お和さん}

3
そんな理想いふふと一たで知れた秋田は佳地

美和さんには信玄一也

「^アそう昔からそう有り、おれが居るべくおれ存

い^ハと秋田菜系より招待笑和さん、何十年たつ

了も私は一昨年、美和さん何者や娘さんたつた

それかう~~おれ~~もなく美和さんおなご存つた

ニニ一スで秋田の信玄と秋の木の葉の

若い美和さんと思ひ出す